



韓国近代小説文体の成立過程に関する研究

石塚, 由佳

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2019-03-25

(Date of Publication)

2020-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7357号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007357>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

論文題目

韓国近代小説文体の成立過程に関する研究

氏名：石塚 由佳

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名 (主) 朴 鍾祐 教授
(副) 濱田 麻矢 教授
(副) 緒形 康 教授

これまで韓国近代文学における文体研究は、特定の作家や作品の文体使用に言及したものがほとんどで、多くの資料に基づき、全体像を俯瞰・比較しながら文体変遷の流れを把握したものはほとんどなかった。そこで、筆者はひととき文体の変化が激しかったと見られる1884～1922年頃(出版年未詳の作品を含む)の小説149部を対象に文体に関する調査を行ったところ、文体使用の変化と同時にその周辺の符号等の表記にも変化が見て取れるということに気付いた。

そのため本論では、文体と併せて符号等の表記まで考察対象に含めて調査を行うことにした。調査項目としたのは、調査対象作品に多く確認することができ、さらに文体と密接な関わりがあるとみられる、文体、補助漢字(補助的に用いられた漢字)、分ち書き、補足説明、棒線(一)、台詞の有無、疑問符(?)、感嘆符(!)である。

本論はこの統計調査の結果を手がかりに、文体の大きな流れと符号等の小さな流れが、小説にどのような影響を与えたのかという視点から、韓国近代小説の成立の一側面について考察することを目的とするものである。

まず第2章では文体の変遷様相、文体と符号の関連様相について明らかにするとともに、符号の中でも近代小説の出現に最も関わりがあるとみられる台詞の変遷過程についてより具体的に考察を行った。第3章では国文体移行により、台詞とともに頻繁に見られるようになった補助漢字を考察対象とし、使用の経緯、特徴について検討した後、補助漢字使用について社会的背景や日本からの影響という視点から見てみることにした。第4章では先の補助漢字を含めた補足説明を取り巻く符号について、変遷の流れを整理した後、各符号の変遷の背景について社会・小説・作家という視点から考察してみた。第5章では本論の調査範囲の中では最も遅く登場したと見られる疑問符と、それに付随する形で感嘆符に関しても考察を行った。具体的には、疑問符を用いた作品・作家について調べた後、疑問符と疑問終結語尾・疑問符と文にはいかなる関連があったのか、それを社会・作家という視点から検討してみることにした。本論の調査によりわかったことは、おおむね次の通りである。

第2章では、漢文体や国漢文体から国文体へと移行する転換期が1910年頃であるという文体の大きな流れと、李人植の新小説(「小説 短編」、『血斗 涙』、『鬼斗 聲』)が発表された1906～1907年頃を契機に多くの新しい符号が使われるようになった符号の小さな流れを確認した。加えて、李人植はこの三作品を通して計画的に新符号の使用を試みた可能性があることと、この三作品は当時はじめて独立した台詞を使用した点から、台詞と符号には何らかの関連性がある可能性が考えられた。そこで、この頃の台詞の変遷様相についてさらに調べたところ、李人植がはじめて試みたとされる「話者名明記形式」は、

明治小説をモデルにしたことが推察された。また、1907年頃からは、歴史伝記小説にも次第に台詞分離形式が見られつつあり、これらの小説では、既存の「引用」の意の一字分下げる表記形式が「台詞」をあらわす符号へと意味を変えて使用されていたこと、またこのような台詞分離形式をいち早く試みた作家らは外国文学に接する機会の多い作家・翻訳作家であったことも併せて確認された。1910年代以降は、明治小説の翻訳である趙重桓『不如歸』等の作品を中心として、台詞の口語化がより一層進んだ結果、「」のみで自然な対話場面が実現されることとなり、「」が台詞をあらわす符号として定着を見ることとなっていく。このように台詞が出現したことによって、符号には、意味が変化したもの(一字分下げた表記、棒線)と、新たにあらわれたもの(疑問符、感嘆符等)という二つの傾向を確認することができた。

第3章では、当時国文体を補足する符号が必要とされた結果、李人植の『鬼の聲』ではじめて国文体の後ろに括弧付けの漢字を入れて意味を補った補助漢字が使われたと見られることや、補助漢字はその便利さから1910年代には様々な小説へ広がっていったと考えられることなどについて提起した。補助漢字は小説ジャンルや場面等に合せて文字数・意味・読み方を変えることが可能であったうえ、李光洙『無情』にみるような「強調」の意味で用いる場合にも適応し得た。また、当時「朗読」されることを前提に作られた新聞では、ハングルで読み方が、補助漢字で意味を把握できる国文体に補助漢字という表記形式が必要とされた結果、広く定着していったのではないかと推察した。さらに、章の終わりに補助漢字登場のきっかけについて考察を行った。この頃補助漢字を考案したとみられる李人植は、日本留学時に日本の両文体に着想を得たとみられる「ルビ式表記」を考案し、自身が主筆を務める『萬歳報』でさっそくこの表記を試みた。しかし、萬歳報社の経済事情や印刷事情により短期間で中断せざるを得ない状況に追い込まれた李人植は、苦肉の策としてルビ式表記の代わりに補助漢字を使ったと見られるのである。結果、補助漢字はその便利さから、他の新小説や翻訳小説にも広がり、定着を見ることとなったことがうかがわれたのである。

第4章では、補足説明を「新しい概念や物を提示あるいは説明する」符号と定義したうえで、これら補足説明を取り巻く符号が、次のような変遷様相を見せたことを提示した。これらの符号は大きく、衰退した旧符号(圓圈、別行、雙行、句切符)、意味等が変化した、定着しなかった符号(小文字の補足説明、外来語の長音をあらわす棒線、その他の棒線)、定着した新符号(感情をあらわす長音の棒線、括弧、補助漢字)の三つに分かれることがわかった。加えて、この補足説明の符号に関しても、1907年頃の李人植の新小説が新旧の転換点と考えられることも併せて確認できた。このうち、旧符号が衰退した要因としては、国漢文体から国文体、単行本から新聞連載小説へと小説を取り巻く環境が変化する際、

紙面が狭くなる状況に直面したが、旧符号は長文や小文字といった視覚的な問題を克服できなかったためと考えられる。反対に、新符号が定着していった要因としては、括弧には、それまで使用方法が細かく分かれていた旧符号の意味を包括し得る意味の広さやわかりやすさに加えて、内面描写や状況説明の用途にも適応できたこと、また補助漢字には国文体の不便さを解消する必要最低限の言葉で意味伝達が可能な便利さがあったためと推測することができる。また、意味が変化した符号には、衰退と定着の両方の傾向が確認されたが、棒線のように小説の変化に柔軟に適応し得た符号だけが定着の道を歩んだと考えられる。もとより、このような補足説明を取り巻く符号のめまぐるしい変化の背景には、留学経験を持つ作家らの影響がうかがわれるのである。

第5章では、疑問符とそれに関連する疑問終結語尾の使用状況について考察を行った結果、次のような変遷の過程を確認することができた。小説における疑問符は1908年以降、一部の作家により少しずつ使用され始め、1912年頃の翻訳小説隆盛期を契機として増加傾向をみせた後、1918年頃にはかなりの定着をみるようになった。疑問符は、はじめは略待上称語尾の疑問文に限って使用されていたものが、次第に、驚きや聞き返し、ひいてはリアリティーある人物描写にもその効果を発揮していたことがテキストから読み取れた。さらに、疑問符を使用した作品のうち半数を超える作品が日本経由の翻訳小説であることや、疑問符を使用した作品は国文体表記であったことも併せて確認することができた。また疑問符登場以後、疑問終結語尾の使用にも反語疑問の減少と略待上称の増加が見られたこと、疑問符の使用箇所は、はじめ台詞部分に限定していたものが、李光洙『無情』にいたると地の文でも使用されるようになったことがわかった。章のおわりに、社会・作家という視点から疑問符を取り巻く背景について、次のような考察を行った。疑問符・感嘆符の登場や台詞描写技術の向上により、口語体に近い表現が追及されるようになると、既存の語尾の一部が不要となったこと、また、封建的身分制度の崩壊という社会的背景により縦より横の人間関係の描写が増えると、略待上称の終結語尾が選択され、略待上称の語尾と相性の良い疑問符が使用される傾向が見られるようになったことが考えられる。そして、なにより疑問符の使用が広がった背景には、翻訳小説の影響があった可能性が考えられたのである。

論文審査の結果の要旨

氏 名	石塚 由佳
論文題目	韓国近代小説文体の成立過程に関する研究
要 旨	
<p>本論文は、1884～1922年頃の韓国近代小説149部を対象に文体に関する調査を行った統計調査の結果を手がかりに、文体の大きな流れと符号等の小さな流れが、小説にどのような影響を与えたのかという視点から、韓国近代小説の成立の一側面について考察することを目的とするものである。</p> <p>第1章は、問題定義として、これまで韓国近代文学の文体研究は、特定の作家や作品の文体使用に言及したものがほとんどで、多くの資料に基づき、全体像を俯瞰・比較しながら文体変遷の流れを把握したものはほとんどなかった。この論文では文体と併せ、文体と密接な関わりがあるとみられる補助漢字(補助的に用いられた漢字)、分ち書き、補足説明、棒線(一)、台詞の有無、疑問符(?)、感嘆符(!)を綿密に検討を行い、おおむね次の通りの結果が得られた。</p> <p>第2章では、漢文体や国漢文体から国文体へと移行するという1910年頃の文体の大きな流れと、李人植の新小説(小説 短編、『血斗 涙』、『鬼斗 撃』)が発表された1906～1907年頃を契機に使われるようになった新しい符号の小さな流れを確認した。李人植はこの三作品を通して計画的に新符号の使用を試みた可能性があることと、この三作品が当時はじめて独立した台詞を使用した点から、台詞と符号には何らかの関連性がある可能性が考えられた。そこで、この頃の台詞の変遷様相についてさらに調べたところ、李人植がはじめて試みたこととされる「話者名明記形式」は、明治小説をモデルにしたことが推察された。また、1907年頃からは、歴史伝記小説にも次第に台詞分離形式が見られつつあり、これらの小説では、既存の「引用」の意の一字分下げる表記形式が「台詞」をあらわす符号へと意味を変えて使用されていたこと、またこのような台詞分離形式をいち早く試みた作家らは外国文学に接する機会が多い作家・翻訳作家であったことも併せて確認された。1910年代以降は、明治小説の翻訳である趙重桓『不如歸』等の作品を中心として、台詞の口語化がより一層進んだ結果、「」のみで自然な対話場面が実現されることとなり、「」が台詞をあらわす符号として定着を見ることとなっていく。このように台詞が出現したことによって、符号には、意味が変化したもの(一字分下げた表記、棒線)と、新たにあらわれたもの(疑問符、感嘆符等)という二つの傾向を確認することができた。</p> <p>第3章では、当時国文体を補足する符号が必要とされた結果、李人植の『鬼斗 撃』ではじめて国文体の後ろに括弧付けの漢字を入れて意味を補った補助漢字が使われたことや、補助漢字はその便利さから1910年代には様々な小説へ広がっていったことなどについて提起した。補助漢字は小説ジャンルや場面等に合せて文字数・意味・読み方を変えることが可能であったうえ、李光洙『無情』にみるような「強調」の意味にも適応し得た。また、当時「朗読」されることを前提に作られた新聞では、ハングルで読み方を、補助漢字で意味を把握できる国文体には補助漢字という表記形式が必要とされ、その結果、広く定着していったのではないかと推察した。さらに、章の終わりに補助漢字登場のきっかけについて考察を行った。この頃補助漢字を考案したとみられる李人植は、日本留学時に日本の両文体に着想を得たとみられる「ルビ式表記」を考案し、自身が主筆を務める『萬歳報』でさっそくこの表記を試みた。しかし、萬歳報社の経済事情や印刷事情により短期間で中断せざるを得ない状況に追い込まれた李人植は、苦肉の策としてルビ式表記の代わりに補助漢字を使ったと見られる。結果、補助漢字はその便利さから、他の新小説や翻訳小説にも広がり、定着を見ることとなったことがうかがわれる。</p>	
主査記載 氏名・印	朴 鍾祐

第4章では、補足説明を「新しい概念や物を提示あるいは説明する」符号と定義したうえで、これら補足説明を取り巻く符号が、次のような変遷様相を見せたことを提示した。これらの符号は大きく、衰退した旧符号(圓圈、別行、雙行、句切符)、意味等が変化した符号(小文字の補足説明、外来語の長音をあらわす棒線、その他の棒線)、定着した新符号(感情をあらわす長音の棒線、括弧、補助漢字)の三つに分かれることがわかった。加えて、この補足説明の符号に関しても、1907年頃の李人植の新小説が新旧の転換点と考えられることも併せて確認できた。このうち、旧符号が衰退した要因としては、国漢文体から国文体、単行本から新聞連載小説へと小説を取り巻く環境が変化する際、紙面が狭くなる状況に直面したが、旧符号は長文や小文字といった視覚的な問題を克服できなかったためと考えられる。反対に、新符号が定着していった要因としては、括弧には、それまで使用方法が細かく分かれていた旧符号の意味を包括し得る意味の広さやわかりやすさに加えて、内面描写や状況説明の用途にも適応できたこと、また補助漢字には国文体の不便さを解消する必要最低限の言葉で意味伝達が可能な便利さがあったためと推測することができる。また、意味が変化した符号には、衰退と定着の両方の傾向が確認されたが、棒線のように小説の変化に柔軟に適応し得た符号だけが定着の道を歩んだと考えられる。もとより、このような補足説明を取り巻く符号のめまぐるしい変化の背景には、留学経験を持つ作家らの影響がうかがわれるのである。

第5章では、疑問符とそれに関連する疑問終結語尾の使用状況について考察を行った結果、次のような変遷の過程を確認することができた。小説における疑問符は1908年以降、一部の作家により少しずつ使用され始め、1912年頃の翻訳小説隆盛期を契機として増加傾向をみせた後、1918年頃にはかなりの定着をみるようになった。疑問符は、はじめ略待上称語尾の疑問文に限って使用されていたものが、次第に、驚きや聞き返し、ひいてはリアリティーある人物描写にもその効果を発揮していたことがテキストから読み取れた。さらに、疑問符を使用した作品のうち半数を超える作品が日本経由の翻訳小説であることや、疑問符を使用した作品は国文体表記であったことも併せて確認することができた。また疑問符登場以後、疑問終結語尾の使用にも反語疑問の減少と略待上称の増加が見られたこと、疑問符の使用箇所は、はじめ台詞部分に限定していたものが、李光洙『無情』にいたると地の文でも使用されるようになったことがわかった。章のおわりに、社会・作家という視点から疑問符を取り巻く背景について、次のような考察を行った。疑問符・感嘆符の登場や台詞描写技術の向上により、口語体に近い表現が追及されるようになると、既存の語尾の一部が不要となったこと、また、封建的身分制度の崩壊という社会的背景により、縦より横の人間関係の描写が増えると、略待上称の終結語尾が選択され、略待上称の語尾と相性の良い疑問符が使用される傾向が見られるようになったことが考えられる。そして、なにより疑問符の使用が広がった背景には、翻訳小説の影響があった可能性が考えられる。

本研究では、多くの作品の綿密な分析に基づき、小説文体の変遷過程を詳細に分析した結果から新小説一翻訳小説一近代小説という従来の見解を文体論から明確に証明したものであり、そのような文体成立こそが近代文学の物語を生み出す要因となったとして韓国近代文学研究に一石を投じた点において研究の獨創性が認められる。

以上の審査結果を鑑み、本審査委員会では、論文提出者・石塚由佳が博士(文学)の学位を授与されるに足る資格を有するものと判定した。

審査委員

区分	職名	氏名	区分	職名	氏名
主査	教授	朴 鍾祐	副査	准教授	梶尾 文武
副査	教授	釜谷 武志	副査	近畿大学 准教授	酒匂 康裕
副査	教授	濱田 麻矢			